

若年層妊産婦が産前・産後の 支援に繋がるために必要な 要素の考察

井上ゼミ

三年グループ（荒井、伊豆、稲垣、猪俣、坂井、前馬）

目次

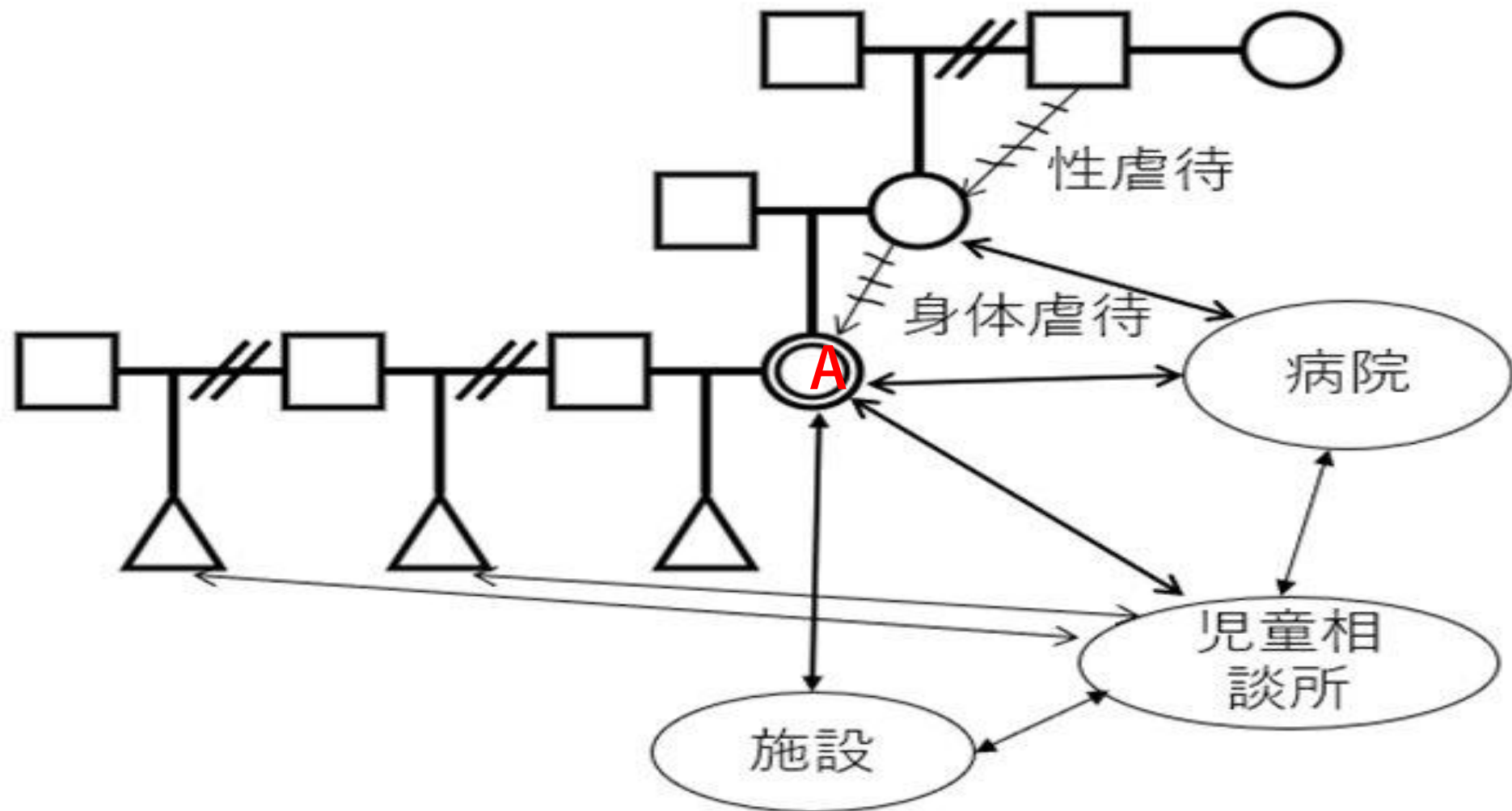
- 1. 背景 & 研究概要
- 2. 事例紹介
- 3. 研究仮説と事例の対応策
- 4. 調査実施内容
- 5. 調査結果とまとめ

1. 背景 & 研究概要



- 社会的背景
 - ▶ 厚労省やこども家庭庁のデータ
 - ★ 10代で出産した方のなかで虐待をする割合は他の年代と比べて高い
- 研究目的
 - ▶ 事例の比較や再検証を通して支援に繋がる要因を
- 研究方法
 - ▶ 二つの事例を比較して検証＋意識調査

2. 事例紹介 1（支援につながった例）

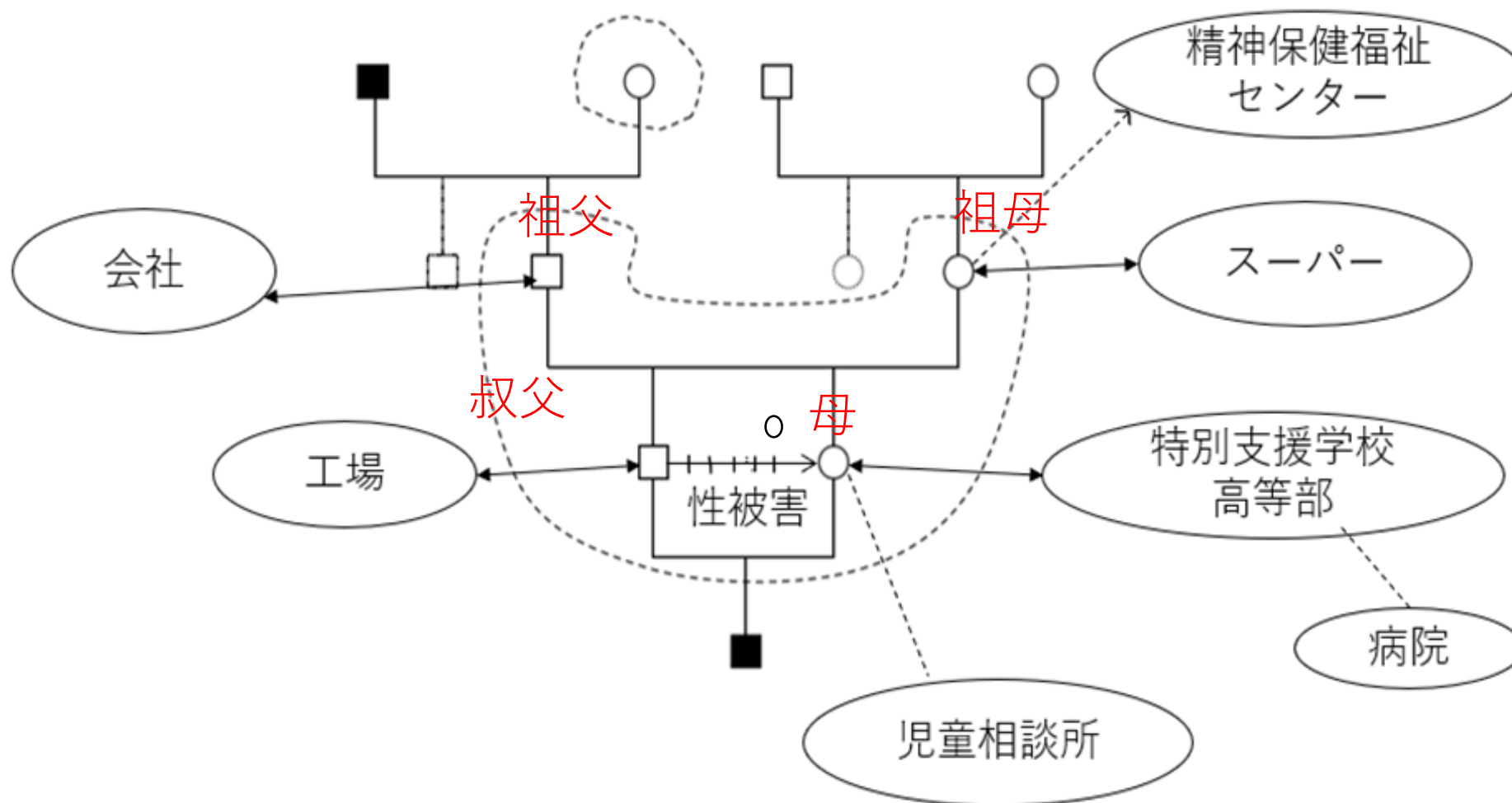


2. 事例紹介1（詳細）

- ○8歳ごろ
- 実母からの身体的虐待が増強し入院。病院から施設へ移り中卒で帰宅
- ○中学3年生
- 赤ちゃんを産みたいと宣言する
- ○20歳
- 第一子妊娠（未婚）
- 叩いてしまい児相に預ける
- 次子出産後すぐに児相へ預ける（虐待予防行動）

- ➡ ○キーワード
- ➡ A子中学3年
- ➡ 「卒業したら赤ちゃんを産むンダ！」
- ➡ →支援者「サミシイネ！」
- ➡ 沈黙の涙を流す（孤独感に耐える）
- ➡ 「この病院で生みたい！」 「上の2人を引き取る！」
- ➡ →強い意志の表明、たくましく育て続けた

事例紹介 2 （支援につながらなかった例）



事例紹介2（詳細）

○幼少期

グレーゾーンのため児相で支援を受ける、2度ほど転居

○中学2年生

叔父との性的な関係が始まる。
口止めされていた。

○高校1年生

親族が妊娠を疑ったが否定
健康診断や性教育を実施していたが
発見には至らず
祖母が担任に話をして、病院を紹介してもらった

○キーワード

父方曾祖父から母への「バカ」
祖父の感情的になりやすい傾向
祖母は知的能力が高くない
→家庭内ヒエラルキー、いびつさ

精神保健福祉士センター、健康診断、
産婦人科の紹介
→妊娠発見には至らず

事例 2 から読み取れたこと

〈本人の特性〉

知的な障害

▶ 意思表明能力

性知識不足（？）

定着度が不明

〈支援や環境〉

いびつな家族関係

家族の性知識不足

心理・社会的な孤立状態

関係機関の対応

3. 比較から立てる仮説

本人の特性 

★自力で変えられない要因

支援や環境 

★家族関係は基本的に前提

支援につながる／つながらない要因

▶発見のしやすさ（身体・性の違い）

▶心理・社会的孤立

性知識不足 

性知識の定着度が不明

関係機関の対応 

伴走型支援しかできていない

もう一步踏み込んだ支援が不足

対応策・予防策

- 性教育のアプローチを増やす

- ▶ 家族参加での講演会のような場を設ける

- 関係機関の支援体制や連携を強化

- ▶ 当事者任せにしない支援体制・制度
 - ▶ 関係機関同士での情報共有

- 心理・社会的孤立をなくす

- ▶ 関係機関の人（教員など）がもっと関われる体制を整える？



4. 調査実施内容

- 概要・目的

- ▶事例2について、多角的な視点を取り入れるため、疑問点や問題点、それに対する支援や取り組みなどについての調査を行った。

- 研究データの収集方法

- ▶自由記述のアンケート調査

- ▶回答者に事例2を読んでもらい、疑問点、問題点、支援方法を時間、人物ごとに分けて答えてもらった。

- 研究参加者

- ▶大学生

※長野大学倫理審査委員会から承認済み

5. 調査結果1

- 回答期間

- ▶8月1日から9月21日まで

- 回答人数

- ▶20人（男性12人、女性8人）

- 学年

- ▶1年：1人、2年：1人、3年：15人、4年：1人、社会人：2人

調査結果2（問題・疑問）

- 担任は産婦人科受診を勧め、病院も紹介したが、最終的に受診を確実にさせる仕組みやフォローがなかった。
- 父方曾祖母が家庭に強い影響力を持ち、警察対応など重要な局面で指示を出していたが、その判断が必ずしも子どもの利益を優先していなかった可能性がある。
- 母が周りの慣れてきた職員、友人に相談しなかったところには、どのような心理が働いているのかが疑問になった。
- 母に対してあまり関心ない＋祖父母は母に対しての扱いが少々軽率に行われていたのではないか。

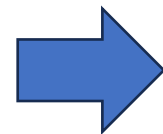
調査結果3（支援・取り組み）

- 家庭への早期介入と啓発。祖父母や父方曾祖母のような影響力の強い大人に対して、虐待や不適切な性行動のリスクについて繰り返し指導・相談支援を行う。
- 性教育を「知識の伝達」で終わらせず、理解度を一人ひとり確認し、日常生活でどう活かされているかを見守る仕組みをつくる
- 判断力が弱い保護者には、保健師や福祉専門職が定期的に関わる
- 健康診断や体重・体調の変化を把握した際は、妊娠や婦人科系疾患の 可能性を強く意識し、受診を確実に行うためのフォロー（保護者や信頼できる大人の同行、日程の調整など）を行う

まとめ

- 事例比較を通して…

★ 支援につながった要因



支援に繋げるための要素

★ 支援につながらなかった要因

- アンケート調査を通して…

★ 多角的な視点を得た

出典・参考文献

- 厚生労働省(2023)「令和4年(2022)人口動態統計(確定数)の概況」
(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei22/>).
- こども家庭庁(2024)「こども虐待による死亡事例等の検証結果等について(第20次報告)」
(https://www.cfa.go.jp/councils/shingikai/gyakutai_boushi/hogojirei/20-houkoku).
- 子どもの虹情報研修センター(2017)「虐待死亡事例 検証報告書」平成29年4月
長野県社会福祉審議会児童福祉専門分科会処遇審査部会
- 小林美智子ら(2021)『MOTHER AND CHILD WELLBEING AROUND THE WORLD 世界の児童と母性』,
資生堂社会福祉事業団, 90, 13-19
- 読売新聞オンライン(2025)「生まれたばかりの男児遺体を自宅に遺棄した疑い、16歳少女を
逮捕…自ら出産か」(<https://www.yomiuri.co.jp/national/20250406-0YT1T50046/>;
2025.11.26) .